

第5回 札幌市立高等学校教育改革方針検討会議 議事録

日 時：平成 28 年 9 月 8 日 10 時～12 時

場 所：札幌市教育委員会 地下 1 階会議室

出席委員：岡部委員、相沢委員、石黒委員、尾崎委員、川嶋委員、近藤委員、佐々木委員、鈴木伸明委員、土佐林委員、林委員、鳴海委員、西川委員、濱野委員、湯谷委員

欠席委員：大原委員、鈴木恵一委員、山下委員

事務局：引地学校教育部長、仙波教育推進課長、長谷川教育課程担当課長、小林高等学校プロジェクト担当係長、広川中等教育学校担当係長、幸丸高等学校担当係長

1 開会

2 事務局説明

小林高等学校プロジェクト担当係長から、下記(1)、(2)について説明。

(1) これまでの議論など（資料 1）

○第 4 回検討会議では、事務局で示した、市立高校の教育が目指す生徒像や市立高校の将来像、教育改革の要となる 4 つの重要項目など、教育改革方針（素案）の基本的なコンセプトについては了承を得られた。

○具体的な内容として、目指す生徒像と市立高校の将来像に関しては、札幌市教育振興基本計画の目指す生徒像などとの整合を図る必要があること、具体的な取組に関しては、平成 28 年度で閉校となる開成高校が築いてきたコズモサイエンス科の成果を、別の学校で継承することができないか、市立高校の教育として、地域に貢献する人材や地域産業を支える人材を打ち出してはどうかなどの意見が出された。

○また、平成 32 年度・33 年度の学級削減に関しては、中学校卒業者の減少という現実のもと、学級削減は自明のことと受け止めなければならない。しかし、この学級削減を肯定的に捉え、例えば、学級削減に伴って生じる教員定数の減少分を、各学校の教育充実に充てることなどを検討してはどうかなどの意見があった。

(2) 教育改革方針（素案）について（資料 2・3）

○目指す生徒像と市立高校の将来像は、教育振興基本計画の内容などを踏まえ、それぞれ 3 本柱で整理している。

目指す生徒像は、次の三つに整理。

- ①夢や希望の実現に向けて、主体的に学び、探究する生徒
- ②個性や多様性への寛容さを持ち、他者と協働し、新しい価値を創造する生徒
- ③積極的に社会と関わり貢献する力を身に付けた生徒

市立高校の将来像は、三つの目指す生徒像にそれぞれ対応する形で、次の三つに整理。

- ①生徒の主体的で探究的な学びを促す、魅力ある学びの場
- ②様々な差異を越えて、多様な生徒が共に学び、成長していく学びの場
- ③地域、企業など社会との関わりを通して成長できる、社会に開かれた学びの場

- 具体的な施策・取組について、取組実施の基本的な考え方として、各取組の教育改革方針における位置づけや重要度などに応じて、計画初年度の平成 29 年度から実施するもの、30 年度から実施するものというように、取組の開始時期を定めて、段階的に取組を進めていくこととしている。
- 29 年度から取り組む主なものは、重要項目 3 の「学習成果の発表」と重要項目 4 の「市立高校コンシェルジュ」である。これらの取組は教育改革の様々な取組を進めていくうえで重要な意味を持つものである。学習成果の発表については、29 年度は無理なく参加できる学校で試行的に実施し、30 年度から本格的に実施する。市立高校コンシェルジュについては、29 年度に組織を構築し、学習成果の発表への支援を中心に行い、30 年度から本格稼働する。
- 続いて、30 年度から取り組む主なものは、重要項目 1 の「学校間連携の推進」や重要項目 2 の「教育相談体制の充実」である。学校間連携については、市立高校単位互換システムの構築や単位制の施行導入など、30 年度の施行実施を経て、本格実施に移行する。教育相談体制の充実についても、他校履修による弾力的な単位認定は 30 年度の施行実施を経て、本格実施に移行する。なお、通級指導に関しては、30 年度の制度施行と同時に開始できるよう、29 年度から準備を進める。
- その他、「多様な学習プログラムの提供に向けた調査研究」や「札幌の自然環境や歴史、産業などに関する学習プログラムの実施」などの新規事業は、31 年度から実施することとして、2 年間かけて実施に向けた準備を行っていく。
- 具体的な取組に対して、第 4 回会議で意見をいただいた項目について、例えば、「コズモサイエンス科の成果の継承」は、教育改革方針 9 ページ下段の「新たな専門学科・コースの設置」の中で実施していくことになり、「地域に貢献する人材や地域産業を支える人材の育成」は、19 ページの「札幌の自然環境や歴史、産業などに関する学習プログラムの実施」などを通じて、主体的に地域に貢献しようとする意識の醸成、まちづくりや産業振興など地域を支える人材の育成に取り組んでいくことになる。
- 資料 3 の「市立高校の教育が目指す生徒像と市立高校の将来像」について、図中央の市立高校の教育を表すピラミッドに関して、市立高校 8 校が一丸となって教育改革を推進していくことを目指し「チーム市立高校」と表現し、ピラミッドの土台である「生涯にわたって活用できる力の育成」を「高校教育の基礎」と表記し、ピラミッド上段の「特色化の充実と共有」と中段の「市高スタンダード」を「市立高校の独自性・共通性」というように標記している。

3 意見交換

各委員から出された主な意見は以下のとおり。

【目指す生徒像と市立高校の将来像】

- 札幌市の教育が目指す人間像の「自立した札幌人」の一つ、「自他を尊重し、共に高め合い、支え合う人」の「支え合う」という文言を、事務局案の「個性や多様性への寛容さを持ち、他者と協働し、新しい価値を創造する生徒」に加えると、より良くなるのではないか。
- 目指す生徒像の表現で、最初の二つは「探究する生徒」「創造する生徒」となっているのに対し、三つ目は「貢献する力を身に付けた生徒」となっている。全てを「〇〇する生徒」とした方が、完成形ではないことも表現でき、良いのではないか。

【具体的取組】

<学校間連携>

- 地方の小規模校では、拠点校が授業を録画し、キャンパス校ではそのビデオを見ながら、その学校の教員が指導するという形態をとっているところもあり、拠点校で特色ある科目等の授業を行う際の参考になるのではないか。
- 学校間連携について、入学した学校以外の授業も受けられるということは、中学校にも大きなインパクトを与える。他校の生徒同士の学び合いは移動時間のロスを考えても意味があるのではないか。
- 学校間連携に関して、自分たちが入学した学校で楽しくやっているところに、他の学校の生徒が授業を受けにきたときに、受け入れる側の生徒はどのように感じるのか。

<学習成果の発表>

- 学習成果の発表について、発表会が単なるイベントになり、この発表会のために取り繕って何かをすることになってしまうのは本末転倒であり、今まで実際に実践してきたものを発表するという部分はおさえておくべき。

<英語教育>

- 英語以外の教科を英語で学ぶことに関して、今課題となっているのは自分の好きな研究を深めるにあたって英語力を必要とするが、それに見合った英語力が備わっていないこと。英語を教授言語とした英語以外の科目も、学校間連携による単位互換で行うのが良いのではないか。英語の勉強をするのではなく、好きなことを勉強する中で英語に慣れていくということもある。
- 開成中等教育学校の場合、中学2年段階の生徒の理科と数学について、日本語を交えながら英語で授業を行っている。生徒の英語力にも差があるが、グループ学習が中心なので、分からない子どもに対して分かっている子どもが教えてあげたりしている。
- 自分の経験でいえば、会話はできても論文など専門的な文書を読むことができない。国は対等に議論ができることに主眼を置いているが、文書に書かれていることを深く捉えることも忘れてはいけない。論文などを読むことができる英語力をどのように身に付けさせるか考えなければならない。
- 開成高校には、高いレベルの英語力を身に付けた生徒が4・5人おり、例えば、まちづくりに関して英語で提言できるような生徒など。これは1年生から英語をツールとして使い、英語力をしっかり鍛えているためである。

<ICT環境整備>

- 開成高校や清田高校で行っている英語の授業をライブで配信し、旭丘や新川の生徒が視聴して、英語でやりとりをするといったことも考えられる。インターネットを活用して双方向の授業を行うことができれば、生徒が移動しなくてもおもしろいことができるのではないか。
- インターネットを活用した双方向の授業は、生徒が移動する連携授業の発展形として考えるのが良いのではないか。
- ICT環境について、インターネットを活用した双方向の授業を想定するならば、市立学校全体とは別に、高校独自のものとしてICT整備を考えていく必要がある。

<市立合同学習会>

- 合同学習会について、課題をこなすことができず負担を感じてついていけないような子どもの学び直しなどにも対応できると良い。

【その他】

- 今まで取り組んできた事業をどのように改編して、新しい事業につなげていくのか、そのプロセスを示すことが必要ではないか。29年度から新しい事業に取り組むことになれば、今までの事業はどうなるのかという議論になる。
- コズモサイエンス科の成果の継承は大いに賛成だが、ノウハウを持っている教員の力が必要となる。人材や財源の確保など強い支援があればやろうと思うが、そのような支援なしに学校の自助努力に任せられると、一部の教員に負担がかかることになり難しい。
- 新しい取組を行うために優秀な人材を特定の学校に集めるようなことは困る。現有勢力だけで回すということでは、市立高校全体の改革を進めるのは難しい。核となるような優秀な人材を育成し、増やしていく体制を検討していくことが必要。
- コズモサイエンス科は、30歳代から40歳代前半の馬力のある教員たちが中心になって作り上げた。今は40歳前後の勢いのある教員が非常に少なくなっている。
- 年齢構成がいびつで、20歳代の若手が数名、50歳代が約8割という状況で、若手が育っていく土壌がない。また、理科や数学などはスペシャリストの教員を増やしていった方がいいのではないか。
- 小学校長会の会議でこの会議のことを報告したが、多くの校長が興味を示していた。中学校の様子は同じ義務教育なのである程度把握できるのだが、高校の情報はあまり入ってこない。近隣の高校のことは知っておきたいので、校長会に対して情報提供してもらえるとありがたい。
- 市立高校の特色が明確になって、市民に受け入れられていくと良い。こういう計画などができると、必ず総論賛成、各論反対となる。事業を進めて行くうえでは、すべてを学校に任せるのではなく、教育委員会の支援等をお願いしたい。急ぐところでは、支援を必要とする生徒も多く在籍する大通高校は、教員の強い気持ちで何とか維持されているが、具体的な手立てが必要だろう。

4 閉会

今後の予定について、事務局から連絡。以上